谷口善太郎年譜

加藤則夫

（年齢はいずれも数え歳）

明治三十二年（一八九九）　一歳

九月十八日（届出おくれ戸籍上は十月十五日）、石川県能美郡国府村（現在の辰口町）字和気リ二百十九番に、父・八右衛門、母・ふさの次男として生まれた。

明治三十九年（一九〇六）　八歳

四月、和気小学校尋常科に入学。

明治四十一年（一九〇九）　十一歳

父・八右衛門は小作農であったがリュウマチのため思うように働けず、母・ふさが近くの陶器工場の薪運びをして家計を支えていた。しかし窮乏は逼迫する一方で、この年から九谷焼和田清吉製陶所に弟子入りをさせられた。以後、高等科を卒業するまで放課後は毎日工場へ通う。気は強かったが病弱であったため陶器運び等は重労働であった。この頃より絵に興味をもちはじめ、花がるたを自作し子供の輪の中心になって遊ぶ。

大正元年（一九一二）　十四歳

三月、尋常科を卒業。成績は首席で、特に担任の土田某の指導を受けて作文はすぐれていた。四月、高等科に入学。「貧乏人の子にゃ学問はいらん」という父親に対し、地主の息子で善太郎を励ましていた教師・山坂某が、自分の弁当箱を毎日学校へ運ばせ、駄賃に授業料の三十銭を出すことで高等科進学を承諾させた。この頃から土田・山坂両教師の家への出入りを許され文学書に接し始めた。二葉亭四迷、樋口一葉、国木田独歩らの作品を読んだが、石川啄木にひきつけられ、啄木を通して自分をみつめはじめた。「少年」「荷をひく馬」はこの頃の体験である。

大正三年（一九一四）　十六歳

三月、和気小学校高等科を卒業。第一次世界戦争直前の不景気で和田製陶所が破産。すでに一人前の職人となっていた善太郎は、村にあったもう一つの工場北出製陶所に雇われた（日給二十三銭）。大戦勃発し、八月頃には好況時代となり日給五十銭、

一年後には請負賃金となった。

大正四年（一九一五）　十七歳

この頃、小学校の若い教師たち（渡辺知重が中心）と村の青年約十名とで「国造読書会」（虚空蔵読書会）をつくる。読書会参加の青年たちは高等科卒業者であったため、教師たちから中学講義録「近古史談」「日本外史」等、「古事記」や「万葉集」「源氏物語」等の古典文学の指導を受けた。月に一円の会費を出しあい、『新潮』『文章世界』『新思潮』等数種の文芸雑誌を購入し回し読みをした。月二回の合評会、回覧帳に小説や詩歌や評論文を書き、年数回同人誌を発行した。善太郎は、芥川竜之介、菊地寛、志賀直哉らの作品を特に愛読したが、読書会で芥川竜之介の作品を担当して発表・論議するなかで本格的な文学鑑賞をはじめた。一方、教師・渡部知重の主張する現代短歌の影響を受け、啄木の「一握の砂」「悲しき玩具」を暗唱するほど心酔するとともに、『日本少年』に短歌を投書し懸賞をねらったりした。また、『新愛知』の北陸版『北陸日報』にも投書。

大正六年（一九一七）　十九歳

六月、母・ふさ他界。投書を通して渡辺順三、土岐哀果、さらに、西村陽吉、西出潮風、青山霞村らを知った。以後、青山霞村主宰の『からすき』（犁社・京都深草）同人たちとの交わりを深め、現代口語歌を数多く詠む。また、「万葉集」の研究を進めた。

大正八年（一九一九）　二十一歳

青山霞村らの選で歌集『平地木（へいちぼく）』を自費出版、雅号・谷口夢草。

大正九年（一九二〇）　二十二歳

一月、戦後恐慌の下で北出製陶所が倒産。父・八右衛門が好況期に四百円ほど借金して買った田一反の残金返済に困り、父と姉・イソを残して東京へ出た。『からすき』の同人たちとの交際を通して学問の必要を痛切に感じ、以前世話になった和田清吉を頼って五反田の製陶所で働かせてもらい、夜は英語学校へ通う。三月、「亡母を想ふ」十四首を『からすき』に発表。八月、盆に帰郷し再び上京。初秋までの間、品川池上本門寺の万燈見物、銀座散歩、明治神宮参拝などを『からすき』東京支社の同人たちとした。十月、悪性感冒で心臓病を併発させる。しばらく静養したが回復せず、貧寒生活のなかでしばしば絶望に陥り望郷の念にかられた。

大正十年（一九二一）　二十三歳

一月、ようやく散策を医師より許され友と横浜へ行く。下旬に突然高熱、再び心臓病をわずらい、苦痛と恐怖に苦しむ。二月、『からすき』東京支社歌会に出席。その日下宿へ帰ると父危篤の報があり、高崎まわりで帰郷。だが、危篤というほどでなかったので、今度は立命館を出て弁護士になることを志し京都へ出た。「狂ほしい静かさ」十三首を『第一の群』（金沢・純正詩社）に発表。三月、父・八右衛門病死。婚期のおくれていた姉・イソを結婚させて単身で再び上洛。妙法院前側町に下宿し、清水焼の土谷工場に就職（月給百円）。四月、「病魔」二十七首

を、六月、二首を『からすき』に発表。

大正十一年（一九二二）　二十四歳

二月、「心さびしく」十三首、随筆「千代女の話」を、三月、「金石小景」五首を『からすき』にそれぞれ発表。この頃、立命館入学のために用意していた二百円が、貯金先の協和銀行（石川）破産のため精算委員会にかかりふいになり、世界中を焼いてしまいたい衝動にかられた。だが、絶望のなかで、こういう場合何らの救済もない法規を知り、はじめて社会の矛盾を感じた。五月、清水焼労働者の間にストライキが起き、集会で奥村甚之助の演説に接し、貧餓だった幼少年期を思い、その原因が謎を解くように判明した。卒先して日本労働総同盟京都連合会に加入。国領五一郎を知る。ただちに京都陶磁器従業員組合を結成し青年部長、続いて京都合同労働組合を創立し組合長となる。六月、日本共産党創立のための京都会議で、オルグにきた荒畑寒村を知る。七月、日本共産党創立。十月、総同盟全国大会に代議員として出席。この頃、山川均に心酔し、「資本主義のからくり」「タンクの水」等を学習。河上肇訳「賃労働と資本」「価値・価格・利潤」や、堺利彦の「空想と科学」（エンゲルスのダイジェスト）を読破。国領らと「共産党宣言」の秘密研究会をつくった。

大正十二年（一九二三）　二十五歳

一月、鞍馬口大宮西入ル下ルの辻井民之助宅で開かれた日本共産党京都支部創立総会に出席。四月、大徳寺の親戚の家へ引越しの手伝いに行き、徳野そとを知った（そとは、明治三十七年九月二日生まれ。石川県能美郡中海村字岩淵の出身。当時、二十歳。善太郎より五年早く上洛し、北区紫野の織物工場で働き、夜は烏丸蛸薬師の看護学校に通学していた）。六月、第一回共産党弾圧のおり組織の中心であった辻井がロシアへ亡命したため、若い国領と善太郎がその後に続発した奥村電機ストライキ等を指導した。闘争・検束・失職・闘争の日々のくりかえしや、地下での連日連夜の活動生活であったが、善太郎にとって初めて体験する充実感のあふれる生甲斐のある年であった。国領五一郎との党活動を通し強い影響を受け大きく思想転換をした。しだいに『からすき』同人たちなどの文学仲間ともはなれていった。

大正十三年（一九二四）　二十六歳

一月、「潜入と蠶食」を『進め』に本名で発表。二月、総同盟大会宣言案を西尾末広案を修正して現行案を国領と書く。以後、労働組合運動における社会民主主義的な路線から共産主義的な路線への方向転換をさせるために、指導的役割を国領とともにはたした。三月、京都労働学校創設。四月、過労と栄養不足で肺病に倒れた。療養をしぶる善太郎は徳田球一に説得され、彼の紹介で三宅島の浅沼稲次郎生家へ転地し、約半年間滞在した。その間、「資本論」第一巻を徹底的に学習。十月、京都へ帰り労働学校の主事兼講師となった。労働運動界での左右の対立が激化するなかで、職業的な活動家になることを決意し、今熊野

宝蔵町の労働学校事務に専従として住む（月給三十円）。労働学校校長は山本宣治、講師に住谷悦治、水谷長三郎、波多野鼎、林要、小田美奇穂、土田杏林。京大学生社会科学研究会の岩田義道、淡徳三郎、泉隆、小林直衛らが協力した。

大正十四年（一九二五）　二十七歳

二月、「労働学校の運動」を『郷土文芸』に須井呈の筆名で発表。五月、日本労働総同盟は左右の対立で分裂。左翼派は日本労働組合評議会を結成、その中央執行委員兼京都地方評議会主事となる。神戸新開地にて労働学校の全国組織である労働者教育協会を結成。山本宣治、野坂参三、櫛田民蔵らと参加した。九月、徳野そとと結婚（看護学校へ通うそとに英語やローマ字を教えたことから始まる交際は、たえずスパイの監視下にあった。そとは善太郎から貰ったハンガリー革命のパンフレットを持っていたため工場を解雇され、石川の岩淵の実家へ帰ったが、そこでも警察のいやがらせに合い、村中の評判となり、親の反対を押しきって結婚するために上洛した）。結婚式当日、善太郎は堀川署に検束されていた。二人が会ったのは一週間後であった。新居は東山区今熊野宝蔵町。

大正十五年（一九二六）　二十八歳

四月、評議会第二回大会、国領がかわって中央執行委員となり大阪に移住。共産党はビュウロー時代にあり、善太郎は京都の党組織の中心となって活動する。浜松日本楽器争議始まる。七月、日本楽器争議のカンパ要請のために吉田二本松の河上肇博士を訪ねる。以後、二十年間の交誼をうけた。九月、結核再発、療養しながらの活動が続く。この頃、「フォイエルバッハ論」「哲学の貧困」「経験批判論」等でマルクス主義の哲学的基礎を、「レーニン著作集」で革命の戦略・戦術を学習したが、当時流行の福本イズムにも影響を受け実践的にも混迷した時期であった。

昭和二年（一九二七）　二十九歳

一月、「評議会の人々」を『解放』に発表。三月、金融恐慌が勃発し大衆闘争に取組んだが、その中で福本イズムに批判的になった。山本宣治との交友深まり、党文書等を渡す。九月、長男・一雄誕生。十月、最初の喀血をした。暮れにコミンテルンの日本に関するテーゼに接し、夜明けのような感動を受けた。

昭和三年（一九二八）　三十歳

一月、「『無条件合同論』の破産」を本名で『解放』に発表。二月、普通選挙法による第一回総選挙に山本宣治を説得して立候補させ、京都二区で当選。善太郎は病気が再発して貧窮の底に寝ていたが、河上肇らと応援演説や論文代筆をして運動した。三月、いわゆる三・一五事件で逮捕された。十四日夜、帰洛中の山本宣治を宇治花屋敷に訪ね、大検挙があるらしいことを伝え、帰宅した直後に検挙された。四月、起訴される。しかし、未決中獄中で二回目の大喀血をし、十月予審決定頃には脚気も加わって危篤状態になったため、十一月に人事不省のまま京都刑務所から担架でかつぎだされた。但し責付出所で(一)居宅に監

視の刑事をつける、㈡外出、面会、執筆の禁止、これを破ると再逮捕する、という条件がついていた。公判は共同破告から分離された。以来五年間余りスパイに見張りされながらの自宅監禁のまま病臥した。訪れる者は医師の安田徳太郎と親戚の者のみ。妻・そとが病夫と乳飲み子をかかえて、陶器の瓶口づくりの内職をして生計を支えたが、惨たんたる日々の連続であった。

昭和四年（一九二九）　三十一歳

三月、治安維持法の死刑法の改悪にただ一人反対した山本宣治が右翼の暴徒に殺された。善太郎は自分が脳天を刺されたような激しい衝撃を受け三回目の大喀血をした。宣治の労働者葬にも行けず喪意の毎日が続く。四月、瀕死の病床で山本宣治を記念するために「日本労働組合評議会史」を執筆することを決意し、妻・そとへの口述筆記で毎深夜奮起した（翌年五月に完成）。九月、「階級戦士としての同志山本宣治」を無署名で河上肇の『社会問題研究』に発表。八月、大山郁夫らの新労農党の運動おこる。三・一五事件で門下から多数の被疑者を出した理由で京都大学から辞職勧告をされていた河上肇から、新労農党の運動に参加すべきか否かの相談をうけ、支持する私見を述べた。十月、「労働組合が『プロレタリアート党支持』といふスローガンを掲げることの誤謬について」を深川一郎の筆名で、十二月、「右翼、中間派組合の争議をどうして応援するのか？」を同名で『社会問題研究』に発表。

昭和五年（一九三〇）　三十二歳

二月、三・一五事件の判決があり同志達は下獄したが、病気のため分離されていた善太郎は一人取り残された。「家賃闘争と労働組合」を二宮武夫の筆名で、「日本労働組合評議会史」を磯村秀次の筆名で八月まで、四月、「メーデー闘争の準備について」を村田信造の筆名で、六月、「ビラによる工場獲得の手段」を同名で『社会問題研究』に発表。この頃、党組織から求められるままに、ビラや論文を書いたが、身元が明らかになることを恐れて一篇々々筆名をかえるほど注意し、ペン・ネームは十六、七になる。七月、新労農党に対するコミンテルンの批判を知り愕然とする。すぐ義弟・徳野菊次を上京させて河上肇に連絡、自分は三日間も病床に呻吟していた。組織から孤立した人間の、少しばかりの過去の経験によってする個人的指導の恐しさを知った。一さいの執筆の筆を折り、徹底的な自己批判をとげた。党との連絡にやっきとなったがつかず、苦しみあせった。生活はますます苦しくなり、二日も三日も何一つ食物を口にしない日も続く、絶望的状況となる。

昭和六年（一九三一）　三十三歳

二月、友人であった旧評議会委員長の野田律太が、プロレタリア作家同盟の幹部である貴司山治を東京から案内して突然来訪。小説を書けと勧められた。文学運動の役割、労働者作家の生まれねばならぬ必然性を説き、作品を書いて運動に参加せよというのであった。だが、善太郎は初めはある距離をおいて対した。大正から昭和にかけて終始労働組合運動のなかで育ってきた活

動家の誰れもがそうであったように、文学運動の大事さを認めながらも、どこか基本的でないもの、遊びに近いものと見る偏見を払拭できずにいた。偏見をうちやぶったのは、作家同盟が党の指導する団体であり、そのなかに組織があることを思いがけなく（善太郎は作家同盟については何も知らなかった）発見し、切断されていた党を再見したからである。そのうえ、再起不能かも知れぬ病人で、なお階級的に何かの役にたつならば、それが自分に可能でかつ生活のたしになるならば、むしろうってつけの仕事であると考え、二時間ばかりの話のすえ約束した。当時、「日本労働組合評議会史」を単行本にする話があり、毎月三十円の印税が一年くらい入る予定になっていたので、その間に作家修業をすることを決意した。これが生涯の一つの転期となった。この月末までに、処女作「三・一五事件挿話」を二日間で、「綿」を一週間で書きあげて、東京の貴司山治へ送った。七月、「三・一五事件挿話」を『戦旗』に、八・九月、「綿」を『ナップ』に、いずれも須井一の筆名で発表。プロレタリア文学として評判がよく、ことに「綿」は当時の文芸批評家の宮本顕治や、蔵原惟人らに激賞され、前途に光明を見出した。

昭和七年（一九三二）　三十四歳

一月、山本宣治に捧げる『日本労働組合評議会史』（上下）を共生閣（田村敬男）から、磯村秀治の筆名で千五百部出版。直ちに発売禁止となる。六月、「踊る」を『プロレタリア文学』に発表。この頃から、貴司山治や大宅壮一らの手で『改造』や『中央公論』に原稿を持込む準備がされ、注文も来るようになった。しかし、一般雑誌に発表するならば「須井一」の身元や住居を明らかにする必要があり、同時にそれは、責付出獄の執筆禁止条項に触れ再収監を意味していた。安田徳太郎に代って診療してくれていた高橋松蔵と太田武夫が一策を案じ、組合運動をして首になった小学校教師・安達精二を表面上の「須井一」に仕たてた。官憲の目をくらまし、安達精二をかばう意味を考えて教員の話を書く。七月、「井魚君の心配」を、九月、「自己批判」を『読売新聞』に発表。十月、須井一こと安達精二の名で送った「幼き合唱」を『中央公論』に、また、「樹のない村」を『改造』にそれぞれ発表。第一創作集『清水焼風景』（綿・踊る・幼き合唱・樹のない村・清水爆風景を収録）を改造社より出版、発禁。十二月、『清水焼風景』の改訂版を改造社より刊行、伏字数百ヵ所。

昭和八年（一九三三）　三十五歳

一月、「労働者・源三」を『改造』に、「庄五郎おやじ」を『都』に、「恐慌以後」（第一篇）を『プロレタリア文学』に、「銃殺―支那の話」を『京都帝国大学新聞』に、「大衆文学の批評活動」を『読売新聞』に、「バットの箱」を『京都日出新聞』にそれぞれ発表。この頃、林房雄、中村光夫、高見順、亀井勝一郎らに評価され激励されるが、宮本百合子から「幼き合唱」「樹のない村」を、藤森成吉の「亀のチャーリー」ととも

に、「一連の非プロレタリア的作品」（『プロレタリア文学』一月号）として否定的に批評され大きな反響をよんだ。三カ月後、宮本百合子は「前進のために」（『プロレタリア文学』四月号）のなかで自己批判した。二月、「恐慌以後」（二）を『プロレタリア文学』に、「お千代」を『文学案内』に、四月、「城砦」を『改造』（『労働者・源三』第二部）を『改造』に、「鉄」を『大衆の友』に、「熊」を『文芸春秋』にそれぞれ発表。この頃、党とも連絡がつき、病床からカンパもできるようになった。自分の任務が明らかになってきたことを喜ぶ。五月、「文芸時評—四月のプロレタリア文学」を『改造』に、「行軍」を『京都帝国新聞』に、七月、「歌ごゑ」（戯曲）を『経済往来』に発表。清閑寺霊山町に転居。この夏、安達精二が共産党シンパ事件にひっかかり、以後小説を書かないということを交換条件にして釈放された。全協のオルグに電車賃をカンパしたことがわかり、須井一の作家活動そのものの禁圧をされた。安達に須井一の名で書かないことを誓う。九月、「船の中で」を『文化集団』に、「逃げる」を『改造』に発表。十月、第二創作集『源三』（逃げる・船の中で、源三・道を求めて・熊・小品四篇を収録）を改造社から刊行。『源三』を最後に「須井一」は三年たらずの生涯に終止符をうつ。

昭和九年（一九三四）　三十六歳

特高の眼をぬすんで泉涌寺御陵あたりまで散歩に出るほど快復した。時には党との連絡のため大阪などへもでかけた。これを特高に見つかり、公判を受けるか、責付出獄を取消すかとせまられた。十月、筆名を加賀耿二に改め、公然と作家活動を始めた。十月、「工場へ—少年時代の一」を『改造』に発表。十二月、三・一五事件の公判を受ける、治安維持法違反として懲役三年執行猶予五年。この年、中井正一や辻部政太郎らを知る。再び貧窮のどん底におちいる。党と連絡きれる。

昭和十年（一九三五）　三十七歳

三月、「雪の夜の話」を『文芸』に、四月、「広告」を『京都帝国大学新聞』に発表。貴司山治来訪し、『文学案内』発行の相談うける。六月、「港一瞥」を『社会評論』に、「暁前の死—或る百姓の一生」を『文芸』に（八月まで連載）七月、「文学を志す人のために」を『文学案内』創刊号に、十月、「プロ文学の現状」を『京都帝国大学新聞』に、「兵助の受難」を『社会評論』に、「血の鶴嘴」を『社会評論』に（翌年三月まで六回連載）「私の最も影響された本」を『文学案内』に、十一月、「批判と反批判・一つの弱点」を『文芸』に、十二月、「今年度の作品と新人」（アンケート）を『文学評論』にそれぞれ発表。文化』『リアル』等の同人たちと接触し、中井と辻部のほかに『世界久野収や能勢克男らを知る。京都における民主主義的文化運動、人民戦線運動の発展に尽くした。病気全快。

昭和十一年（一九三六）　三十八歳

二月、「海上雲遠し—銭屋五兵衛実録」を『水産公論』に（翌年十二月まで十一回連載）、三月、「再生記」を『改造』に、「或

る平凡な話」を『文学評論』に、「コンクール作品を読む」を『京都帝国大学新聞』に、四月、「参宮列車で」を同新聞に、五月、「監獄部屋に就いて（貴司君を駁す）」を『学生評論』に、「作家の感想―或る日の感想」を『文芸』にそれぞれ発表。加賀耿二創作集一『血の鶴嘴』（お千代・再生記を収録）を文学案内社より刊行。上京して太田典礼方に泊り、中野重治、窪川鶴次郎らに会った。作家同盟はすでに解散していて党組織に接触できなかった。六月、京都大学学生を中心とする『学生評論』に関係し、スペインにおける人民戦線に刺激された学生の自宅への出入りが激しくなった。能勢克男らのグループは文化的新聞『土曜日』の発刊を決定、その編集委員となった（週刊。とぶように売れ年末には一万部を越す）。人民戦線運動のなかで他に藤谷俊雄、富岡益五郎、林要、北川桃雄、小野俊彦、新村猛、真下真一、大山誠、和田洋一、野間宏ら進歩的インテリゲンチャ及び学生グループを知る。野坂参三の「日本共産主義者への手紙」の主旨で活動した。七月、「素人の経験―労働者作家の小説勉強法」を『文学案内』に、八月、「途上」を『改造』に、「ゴリキイの死に対して日本の勤労作家から贈る言葉―『母』におけるゴリキイの意義」を『文芸集団』に、九月「荷を挽く馬」を『学生評論』に、投稿審査発表「報告文選評」を『文学案内』に、十月、「少年」を『文学界』に、「女工スポーツ」を『日本評論』に、「報告文選評」を『文学案内』に、十一月、「私の息子」を『性教育』に、「小説選評」を『文学案内』に、十二月、「或る羽撃ち」を『文学案内』に、「軍事工場地帯―もはや景気なし」を『改造』にそれぞれ発表。

昭和十二年（一九三七）　三十九歳

一月、「或る正月」を『京都帝国大学新聞』に、「裸になる女」を『夕刊大阪新聞』に、「報告文選評」を『文学案内』に、三月、「希望館」を『中央公論』に、「家鴨の子たち」を『土曜日』に、四月、「あの頃の日記」を『文学案内』に、「美しき自然」を『若草』にそれぞれ発表。七月、京都の学生運動、文化運動が発展し自宅は学生達の集会所のようになったが、日中戦争勃発し小説の執筆が困難となる。八月、「帰郷」を『改造』に、十月、「清水あたり」を『京都帝国大学新聞』に、十一月、「島木健作著『生活の探求』をよむ―掘り出された一つの生活」を『京都帝国大学新聞』にそれぞれ発表。この月、人民戦線事件で検挙された。『学生評論』『世界文化』『土曜日』等の集団は全部破壊された。四十日余り残酷な拷問で取調べられたが、何一つ証拠はとられなかったので十二月末、執筆禁止を言渡されて釈放された。再び廃人同様のからだになり、病気再発。

昭和十三年（一九三八）　四十歳

二月、衣笠貞之助を知り、病床にあってシナリオ・ライターになる。そのすすめにより、森鴎外原作の「栗山大膳」を脚色した「黒田誠忠録」（衣笠作品）を田井善三の筆名で書く。続いて松竹下賀茂撮影所に関係した。この頃保護観察付となり、知恩院の某僧侶が月二、三回来て訪問者名や手紙を点検していった。

七月、衣笠貞之助を中心にして新日本映画研究所を設立した。暗い谷間にあって新しい進歩的な歴史映画を作ろうという運動で、加納竜一（香野雄吉）、長江道太郎、楠田清、大曾根辰夫、土井逸雄、八木隆一郎、吉川良範、絲屋寿雄、加賀耿二らの同人であった。大部分が黒表（ブラックリスト）に登録されている人々であったので、寺町今出川下ルの研究所には、下賀茂署の特高がいつも訪れてきていた。八月、「山蘭」を『若草』に、「柿の話」を『京都帝国大学新聞』に発表。

昭和十四年（一九三九）　四十一歳

二月、長女・佳子誕生。三月、新日本映画研究所弾圧され、七月、解散。八月、「強い勝子」を『若草』に発表。十一月、「秋葉東三著『西陣』を読む」を『京都帝国大学新聞』に発表。十二月、松竹撮影所を首になった。天皇制ファシズムの狂暴と戦争の拡大の下で絶望状態に陥りがちになる。窮乏と孤立のなかで病をやしなうのみ。善太郎の生涯にとって、もっとも苦しい時期である。

昭和十五年（一九四〇）　四十二歳

三月、「立札」を『中央公論』に、「春の彼岸」を『京都帝国大学新聞』に発表。『工場へ』（工場へ・少年・ある頃の日記・夕しぐれ・港一瞥・裸になる女・清水のあたり・或る百姓・山蘭・強い勝子を収録）を東亜公論社から刊行。四月から六月にかけて、中央公論社特派員として友人・絲屋寿雄と中国大陸へ渡った。北京、張河口、大同、太原、順徳、開封、除州、南京、上海と廻る。太原で八路軍の女捕虜に会い、文化工作隊の部隊長をしていた劇作家・青江舜一から毛沢東の「持久戦論」「遊撃戦術」（司令部極秘の日本語訳）を得、順徳に三週間滞在して前戦を見たり農民に接し、中国人民必勝の信念、前途の希望を得て元気を回復して帰国。弾圧のためルポルタージュは何も書かない。十月、「枝から枝へ」を『京都帝国大学新聞』に発表。

昭和十六年（一九四一）　四十三歳

一月、「鏡」を『西日本』に、「国際列車」を『京都帝国大学新聞』に、四月、「元氏の二日間―北支の印象より」を『大陸』に、八月、「京の夏」を『京都帝国大学新聞』に、「北支の農民」（調査報告）を『中央公論』（十月まで連載）にそれぞれ発表。九月、保護観察師が新興キネマの永田雅一にかわり、そのすすめで、新興キネマ（後の大映）京都撮影所に入社、脚本部員となる。大映では月一回永田雅一の演説をきくこと、企画会議に出席し、何本かの脚本を書くことだったが、太平洋戦争に突入した後は、情報局、参謀本部の直接介入があり、これに抗してほとんど書かなかった。「勘忍料一万石」「海峡の風雲児・ヤマトタケルノミコト（?）」「宇品港」等を書いたが「高杉晋作」のみ採用（?）。十二月、「北支の百姓について」を『不動産時報』に発表。ひたすら終戦を待つ。

昭和十九年（一九四四）　四十六歳

三月、長男・一雄死す。第一工業学校（今の洛陽高校）で特攻隊志願をしなかったために配属将校から憎まれ、霙の中で伏前進

を三日間強制され、肺炎、肋膜、結核と発病し一年三ヵ月病臥していた。河上肇と再び結ばれ、非常な激励を受けた。

昭和二十年（一九四五）　四十七歳

春ごろ、「狐の呉れた赤ん坊」（菊地寛の命名）が採用になる、演出・丸根賛太郎、主演・坂東妻三郎。三月、丹波胡麻郷に移住。家族を農村に移し、自らは本土決戦の混乱の中で人民戦争にたたねばならぬかも知れないことを決意。開拓農民となる。京都で「文学サークル」を作る。八月、終戦を開墾地で迎えた。ただちに党再建運動に参加。十月、延安からひきあげてまもない野坂参三を京都に迎えた。十一月、「蕎麦まき」を『新生日本』に発表。十二月、日本共産党再建。絲屋寿雄、住谷悦治らと近代日本研究会を創立。大映を退社。

昭和二十一年（一九四六）　四十八歳

一月、河上肇、吉田上大路町で死去、棺をかつぐ。「十姉妹」を『教養』に、四月、「浮雲過太空—河上先生をおくる」と「草の塚」を『東西』に、「蕾の梅—山宣追悼会参列記」を『日本輿論』に、「牢獄と貴族と」を『時論』に、五月、「メーデー昔話」を『労働評論』にそれぞれ発表。六月、党京都地方委員会再建、委員となる。丹波・丹後で農民闘争と組織化に没頭、胡麻郷農民組合を創立し、日本農民組合京都府連合会再建に参加、顧問となる。また、胡麻の「島ヶ岳句会」を指導する一方、京都に出て日本文化連盟の運動に参加、京都支部議長となる。七月、「逃亡記」を『文明』に発表。『綿』を三一書房より再刊。八月、「その頃の河上先生のこと」を『雑草集』に発表。九月、「解放は自らの手で」を『京都大学新聞』に発表。

昭和二十二年（一九四七）　四十九歳

四月、京都第二区より党公認として衆議院選挙に立候補、落選。十二月、「いのししの被害」を『農政評論』に発表。

昭和二十三年（一九四八）　五十歳

五月、「待月昇」を『回想の河上肇』に発表。八月、『日本労働組合評議会史』を本名で高桐書院から再刊。九月、『清水焼風景』を伏字をおこして三一書房から再刊、十二月に郷土書房より刊。九月、党公認で京都府から教育委員に立候補、落選。新日本文学会中央委員に選ばれた。

昭和二十四年（一九四九）　五十一歳

一月、京都第一区より衆議院選挙に立候補、初当選。四月、「議員に選ばれて」を『新日本文学』に、五月、「メーデーに思う」を『労働評論』に発表。京都市左京区一乗寺築殿町へ転居。

昭和二十五年（一九五〇）　五十二歳

二月、『改造文芸』の座談会「共産党首脳文学者と語る」に、野坂参三、宇野浩二、豊島与志雄、石川達三らと参加。六月、党中央委員追放のあとをうけて党臨時中央指導部員となる。朝鮮戦争勃発と同時にマッカーサーによって公職追放された。この年、蜷川虎三に京都府知事出馬を説得。

昭和二十六年（一九五一）　五十三歳

六月、「道づれ」を『人民文学』に発表。火災保険の外交員を

しつつ、半非合法的に党活動を続けた。

昭和二十七年（一九五二）　五十四歳

一月、「犬と泥棒」を『人民文学』に発表。四月、公職追放解除。党京都府委員となる。九月、京都第一区より衆議院選挙に立候補、落選。のち結核性腹膜にたおれ、二年余り病床につく。

昭和二十八年（一九五三）　五十五歳

十二月、『日本労働組合評議会史』（青木文庫）を青木書店より刊行。

昭和二十九年（一九五四）　五十六歳

十二月、『清水焼風景』（清水焼風景・恐慌以後収録）を三一書房（日本プロレタリア長篇小説集5）より刊行。病気快復。

昭和三十年（一九五五）　五十七歳

二月、京都第一区から衆議院選挙に立候補、落選。党常任勤務員となる。

昭和三十二年（一九五七）　五十九歳

京都府委員、書記（委員長）に任じられた。関西地方委員となった。

昭和三十三年（一九五八）　六十歳

五月、京都第一区から衆議院選挙に立候補、落選。七月、党第七回大会代議員出席。

昭和三十五年（一九六〇）　六十二歳

府委員会常任委員として安保闘争を闘う。七月、ソ連に旅行。十一月、京都第一区から衆議院選挙に立候補、当選。追放されてから十年目の議席奪還。

昭和三十六年（一九六一）　六十三歳

第八回党大会で中央委員となる。七月、国会議員団として中国を旅行。九月、国会議員団としてソ連を旅行。『議会と自治体』の編集責任者。十月、「公園で」を『小説・中央公論』に発表。

昭和三十八年（一九六三）　六十五歳

四月、「『綿』をかいたころ」を『新しい人』に、五月、「私の学校」を『民主青年新聞』に、十月、「第二の故郷・日吉町」を『日吉陶業誌』に発表。十一月、京都第一区の衆議院選挙で、松本清張や中野重治らの応援もうけトップで当選。十二月、『谷口善太郎小説選』（綿・踊る等十一編収録）を新日本出版社より刊行。「党躍進祝賀会で」を『アカハタ日曜版』に発表。

昭和三十九年（一九六四）　六十六歳

三月、「年末年始」を『文芸春秋』に、七月、「河上肇と共産党」を『読者の友』に、その他小品多数を発表。

昭和四十一年（一九六六）　六十八歳

十一月、写真集『谷口善太郎の歩んだ道』を京都民報社より刊行。他に小品多く発表。

昭和四十二年（一九六七）　六十九歳

一月、京都第一区衆議院選挙で当選。小品数篇発表。

昭和四十四年（一九六九）　七十一歳

五月、『七〇年への道』を京都民報社刊（パンフレット）。小品数篇発表。十二月、京都第一区から衆議院選挙に立候補、トッ

プ当選。

昭和四十五年（一九七〇）　七十二歳

十一月、沖縄へ調査、報告文「怒りに燃える島」を『赤旗』に発表。この年、旧友・川上貫一死去の後、党衆議院議員団長の任をつぐ。

昭和四十七年（一九七二）　七十四歳

四月、『つりのできぬ釣師』（わが経歴・戦後雑草・思い出の人びと・河上肇・川上貫一・小品拾遺を収録）を新日本出版社から刊行、ベストセラーとなる。五月、『つりのできぬ釣師』の出版祝賀会が、旧友・蜷川虎三、末川博、住谷悦治、田畑忍、細野武男、重沢俊郎、西山卯三らのよびかけにより楽友会館でひらかれた。七月、『綿』（谷口善太郎小説選）を新日本出版社より刊行。十月、後援会資料『たにぜん』（京都に住んで五十年・鉄等を収録）を京都民報社より刊行。この年、河上肇に関する論文等数篇書く。十二月、京都第一区から梅田勝とともに衆議院選挙に立候補（一区二名立候補は善太郎の提起による）、二名当選、自らもトップで当選。

昭和四十八年（一九七三）　七十五歳

四月、『キリスト教新聞』で武藤富男と対談（七月にキリスト新聞社より刊行）。この月、アフリカのコートジボアールで開かれた列国議会同盟春季会議に日本議員団の一員として出席、エジプトから単身で帰国。五月、泌尿器系統に痛みあり加療。代々木病院や都立大久保病院に入院。十二月、代々木病院に入院中、塩田庄兵衛と「『日本労働組合評議会史』について」対談。

昭和四十九年（一九七四）　七十六歳

三月、京都府知事選挙で蜷川虎三応援のため帰洛。四月、慶応病院に入院。じん臓しゅようの疑いで手術後、腸閉そくを起こし、化のう性髄膜炎と局限性腹膜炎を併発、六月五日午前八時半頃心臓衰弱のため呼吸困難におちいり、八日午前五時五十分に永眠した。正午に千代田区富士見町衆議院議員宿舎で党関係者の告別式、その夜京都の一乗寺東水干町二三の自宅で通夜、九日東本願寺岡崎別院で告別式。法名釈・願生院善真。七月十二日東京の青山斎場で共産党による葬儀。七月二十日京都府委員会によって勤労会館で追悼式。

昭和五十年（一九七五）

四月、『綿・幼き合唱』（新日本文庫）を新日本出版社が刊行。六月八日、一周忌納骨法要を東大谷墓地で行われた。十二月、『日本労働組合評議会史』（塩田庄兵衛との対談も収録）を新日本出版社が刊行。

昭和五十一年（一九七六）

九月二十三日、東大谷墓地で谷口善太郎の遺徳をしのぶ顕彰記念碑「守道不封己」（道を守って己をあつくせず）の除幕式が行われた。

（あとがき）

この年譜は、昭和四十九年九月十四日、京都市左京区一乗寺東

水干町の谷口そとさん宅で営まれた谷口善太郎百ヶ日追善供養の際、関係者にお配りした『須井一（加賀耿二）年譜』を、若干補訂したものである。国崎望久太郎先生、森本修先生、谷口そと夫人、面甚左衛門氏、家重考氏、千原明子さんら多くの諸氏の御教示いただいたことに感謝の意を表したい。なお遺漏、誤りもあることと思われるが、大方の御教示を得て補訂を期したい。

――一九七六年十二月――